



地域に貢献し、地域で学ぶ活動
教養C群サービスラーニング科目

2024年度 シチズンシップ・スタディーズ 活動報告会 資料集

立命館大学サービスラーニングセンター
衣笠 尚学館1階

Tel: 075-465-1952 / Fax: 075-465-8247

B K C セントラルアーク2階

Tel: 077-561-5910 / Fax: 077-561-5912

O I C A棟1階AN事務室

Tel: 072-665-2195 / Fax: 072-665-2059

(窓口時間：平日 10:00～17:00)

サービスラーニングセンターE-mail: ritsvc@st.ritsumei.ac.jp

サービスラーニングセンターHP: <http://www.ritsumei.ac.jp/slc/>

目次

はじめに

シチズンシップ・スタディーズとは	P.1
活動報告会 次第	P.2
スケジュール	P.3

発表資料

時代祭応援プロジェクト	P.4~5
堂本印象美術館広報プロジェクト	P.6~7
嵐電×地域×立命館フジバカマプロジェクト	P.8~9
キャンパス漢字文化普及プログラム	P.10~11
南草津と「宿場町・草津」を繋げるプロジェクト	P.12~13
次世代の草津ブランド商品をつくる	P.14~15
投票率向上に向けた模擬選挙イベント	P.16~17
草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト	P.18~19
茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	P.20~21
子どもたちの「学び」や「体験」の機会をつくる ために100人が参加するクリスマス会を運営する	P.22-23
しゅくだいかふえ	P.24-25
そだちっこプロジェクト	P.26-27
国際理解教育外国人 サポーター派遣事業	P.28-29

報告会に寄せて （担当教員からのメッセージ）

「持つ」ものを「活用する」ということ（山口 洋典 先生）	P.30
市民参加する人生（小辻 寿規 先生）	P.31
地域で他者にまみれ争点を知る（秋吉 恵 先生）	P.32

シチズンシップ・スタディーズとは

ーボランティア活動を通して地域で学ぼう！ー

「シチズンシップ・スタディーズ」は、2020年度まで開講してきた「シチズンシップ・スタディーズ」での経験を基盤に、学生実態に合わせて2020年度教養改革で、半期科目として設置した立命館大学サービスマーケティングセンターが開講する正課科目です（課外活動ではありません）。この授業は、受講生がボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育み、専門知識の応用的な理解を深めることを目標としています。

ボランティア活動は、大学のキャンパス内だけでは得られない、かけがえのない経験を受講生にもたらしてくれます。さらに、地域で活動を行うことは、自らが暮らす地域をこれまでとは違った視点で捉えることを可能にするだけでなく、大学で学ぶ知をいかに地域で活かせるかを学ぶ契機となります。ボランティアプログラムの開発・運営にあたっては、大学やサービスマーケティングセンターが地域や海外等も含めた行政、公的機関、NPO、地域組織などと協定（覚書）を締結した上で実施します。ボランティア活動の期間は、数日程度の短期で行うものから、数ヶ月程度の長期で行うものまでさまざまです。受講生が自身の興味や関心に沿って、参加するボランティア活動を選択することができます。

ボランティア活動の魅力を体感しながら、大学で学ぶ知に生きた風を呼び込んでください。

ーボランティアだけど奉仕活動じゃない。授業だけど講義じゃない。 それがサービスマーケティング！ー

「シチズンシップ・スタディーズ」は、「奉仕活動」ではなく「ボランティア教育」プログラムです。ボランティア教育とは、体験的学習の一形態で、ボランティア活動を中心に事前・事後の学習（研修・振り返り）を組み、明確な教育目的に基づいて行われる教育プログラムです。よって、ボランティア活動を通じて、他者や地域（コミュニティ）の役に立つだけでなく、そこから学習効果を得られるよう設計されます。この点が、純粋な「奉仕活動」との違いです。単にボランティア活動に参加すれば、単位が認定されるというわけではありません！ボランティア活動を通して何を学びたいのか、確かな問題意識をもって取り組むことが重要です。

また、このような教育手法は、欧米ではサービスマーケティング(service-learning)またはコミュニティサービスマーケティング(communitary service-learning)と呼ばれています。

2024年度実施プロジェクト・プログラム一覧

2024年度は、下記の地域団体にご協力いただき、49名の受講生を受け入れていただきました。

開講キャンパス	クラス	プロジェクト名	受入団体	担当教員
衣笠	GA	時代祭応援プロジェクト	平安講社 第八社	山口 洋典
		堂本印象美術館広報プロジェクト	(公財) 京都府立 堂本印象美術館	
		嵐電×地域×立命館フジバカマプロジェクト	衣笠キャンパス地域連携課	
		キャンパス漢字文化普及プログラム		
BKC	G1	南草津と「宿場町・草津」を繋げるプロジェクト	草津市(教育委員会)	小辻 寿規
		次世代の草津ブランド商品をつくる	草津市(商工観光労政課)	
		投票率向上に向けた模擬選挙イベント	草津市(選挙管理委員会)	
		草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト	(公財) 草津市コミュニティ事業団	
OIC	GV	茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	(一社) みずとわ	秋吉 恵
		子どもたちの「学び」や「体験」の機会をつくるために100人が参加するクリスマス会を運営する	NPO法人 み・らいず2	
		しゅくだいかいふえ	うちラボ	
		そだちっこプロジェクト	みんなのほっとルーム	
		国際理解教育外国人サポーター派遣事業	(公財) 大阪府国際交流財団	

活動報告会 次第

【開催日時】 2025 年1 月11 日（土） 13：00～16：10

※ 12時よりポスター閲覧可能

【開催場所】 立命館大学 大阪いばらきキャンパス

フューチャープラザ1階イベントホール（B棟1階）

【スケジュール】

時間	内容
12：00～13：00	ポスター事前閲覧可能
13：00～13：15	オープニング（開会のご挨拶、評価シート説明など）
13：15～13：35	第1セッション
13：40～14：00	第2セッション
14：00～14：15	休憩
14：15～14：35	第3セッション
14：40～15：00	第4セッション
15：00～15：15	休憩
15：15～15：45	受入先講評
15：45～16：00	教員講評
16：00～16：05	閉会のご挨拶
16：05～16：10	事務連絡

活動報告会 スケジュール

【ポスターセッション時間割】

チーム コード	プロジェクト名	セッション①	セッション ②	セッション③	セッション ④
GA_1	時代祭応援プロジェクト	○	○	○	○
GA_2	堂本印象美術館広報 プロジェクト	○	○	○	○
GA_3	嵐電×地域×立命館フジバカマ プロジェクト	○	○	○	○
GA_4	キャンパス漢字文化普及プロ グラム	○	○	○	○
G1_1	南草津と「宿場町・草津」を 繋げるプロジェクト	○	×	○	×
G1_2	次世代の草津ブランド商品をつくる	×	○	×	○
G1_3	投票率向上に向けた模擬選挙 イベント	○	○	○	×
G1_4	草津市×立命館 大学生の まち活応援プロジェクト	×	○	×	○
GV_1	茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	○	○	○	○
GV_2	子どもたちの「学び」や「体験」の機会 をつくるために100人が参加するクリスマ ス会を運営する	○	×	×	×
GV_3	しゅくだいかふえ	○	○	○	×
GV_4	そだちっこプロジェクト	○	○	×	×
GV_5	国際理解教育 外国人サポーター派遣事業	×	○	×	×

※当日の状況により、一部変更する場合があります。

2024 年度時代祭応援プロジェクト

メンバー：大田博雅、工藤慎也、坂本陽汰、高橋心、綱島彩乃、永倉杏莉

1. プロジェクト概要

1-A. 時代祭応援プロジェクトとは

- ・平安講社第八社をフィールドとし、京都三大祭の一つである時代祭の準備・本番に参加して、京都の歴史や文化を深く学ぶ。
- ・防災訓練や夜回り活動などの地域活動を通して、地域社会の現状や課題、繋がりについて体験し、学ぶ。
- ・異なる年齢層の方々と出会い、作業することで様々なことを学びながら対話力を鍛える

1-B. 受け入れ団体について

- ・時代祭を運営する市民団体「平安講社」のうちの一つである「平安講社第八社」
- ・「社」とは京都市内を11地域に分けたときに使われる単位のこと。
- 一つの「社」は7～30の学区で構成され、平安講社第八社は中京区・朱雀学区に属する。
- ・明治維新時代の維新勤王隊列を担当（以下、勤王隊に省略）
- ・立命館大学卒業生の太田さんが、受け入れ担当者

2. 時代祭とは

- ・毎年10月22日に平安神宮で行われる京都三大祭の一つ。明治28年から始まった。
- ・幕末に起こった蛤御門の変で京都の市街地の大半は焼け野原になった。また、東京遷都(1869年)により京都は大きく変化し、多くの人が京都から離れた。そんな中、京都千年の都の歴史と文化を誇りとした当時の人々は、心を一つにして京都復興を願い、様々な事業を進めた。その京都復興の仕上げが、全国民や世界の人々を対象とした博覧会や平安遷都1100年記念祭、京都市民の心のよりどころである平安神宮の創建や京都人の心意気の象徴、時代祭である。
- ・動く歴史風俗絵巻といわれており、明治維新時代から平安時代まで時代をさかのぼりながら京都御所から平安神宮まで行進
- ・8時代20列に分かれ、時代装束姿の京都市民約2000人が行進する

3. 課題

- ・高齢化が進む昨今、祭の準備や運営は年々厳しくなっている。
- 地域住民は、住みやすい地域環境づくりのために日頃から地域安全や福祉など様々な活動を行ってきた。そして時代祭の役員の多くは、これらの活動も兼職している。
- ・このプロジェクトでは、時代祭、地域活動に参加して地域の実情や課題への理解を深める。

4. 活動スケジュール

		プロジェクト活動	概要
9月	20日	ガイダンス/入隊式	平安神宮にて事前ガイダンス
	21日	勤王隊の練習補助開始	9月26日～10月20日まで勤王隊の演奏・行進練習の補助
10月	13日	衣装渡し	平安神宮時代祭収蔵庫にて衣装の搬出・仕分け作業
	15日	宣状式	平安神宮にて時代行列の参役に選ばれた平安講社員の神前祈願

	20日	衣装着付け	最終練習、行進練習、衣装着付け説明
	21日	勤王隊最終練習	隊士集合場所の設営、進行路付近への看板掲出、前日準備
	22日	時代祭本番	男子受講生は維新勤王隊列、女子受講生は志士列に参列
11月	3日	衣装戻し	平安神宮時代祭収蔵庫へ衣装返納
	5日・20日消防団夜回り		中京区朱雀第四消防分団の夜回りに参加
12月	5日・20日消防団夜回り		中京区朱雀第四消防分団の夜回りに参加
1月	11日	活動報告会	OICにて時代祭応援プロジェクト報告会

5. 反省と学び

反省	学び
・例年に比べ、受講生が地域活動に参加できた回数が少ない ・受講生内での話し合いが中心となり、平安講社第八社や地域のニーズをつかみ行動することができなかった ・平安講社第八社の一員としての自覚が足りない ・自主企画活動に集中しすぎてしまい、地域活動参加の方が疎かになった	・時代祭に関わる方々の想いと文化を継承していく大変さ ・地域でのつながりが希薄になっている現在、住民同士のつながりを育むことのできる地域活動の重要性 ・地域との繋がりが災害時での助け合いにつながる ・地域を知るために現場に出ていく重要性

6. 自主企画活動

○成果目標：来年度以降の受講生や隊士の方が活動に理解を示し、より意欲を持って活動に参加するようになる。

〈第一企画〉

○行為目標：24年度時代祭P受講生がプロジェクト期間内に経験した時代祭や地域活動の活動内容を冊子でまとめる。

○企画内容：シチズンシップ・スタディーズ時代祭応援プロジェクトに関する冊子

・目的：来年度以降の時代祭応援P受講生が活動に対する理解を深め、より意欲をもって活動に参加することができるようになる。

・現状：作成完了せず。平安講社第八社や24年度記録集、地域のまとめにするのか方向性を再協議中。報告会后、作業を続ける予定。

〈第二企画〉

○行為目標：前年度の隊士募集に向けた情報を知り、今年度の情報発信をよりよくするために八社の方と協働する。

○企画内容：ポスター作成

・目的：隊士減少に歯止めをかけ、活動人数の増加を目指す。

・現状：完了せず。地域の方と話し合いの結果、ポスター以外で求められている物が見えてきた。作業を続けるには、もう一度地域の人々との共通認識を持つ必要がある。報告会后、関係者の方と話し合いの場をセッティングしていく。

堂本印象美術館広報プロジェクト

2025 年 1 月 11 日

大角明日香 小西玲未 筒井乃紅
野坂聖華 平野詩珠佳 藤原真由美

堂本印象美術館とは

堂本印象が 1966 年に個人で設立。建物全体からドアノブまで全て堂本印象がデザインしている。1922 年に作品、美術館、財産を京都府に寄贈したことで「京都府立堂本印象美術館」となる。立命館大学衣笠キャンパス正門の正面に位置する。

堂本印象(1891 年～1975 年) 大正から昭和にかけて京都で活躍した日本画家。京都市上京区に生まれ、西陣織の図案描きから日本画家に転向後、帝国美術院展覧会において華々しい業績を残す。1961 年に文化勲章を受賞。京都市立絵画専門学校の教授を務めるなど後進の育成にも尽力した。

堂本印象美術館が抱える問題

- ・ 有料入館者数より無料入館者(65 歳以上)数が多い
- ・ 2023 年の入場者数は 2018 年から 60%減少

しかし、京都市の近年の観光消費額はコロナ禍以前を上回っており、観光客数もコロナ禍以前の値に近づいている



観光消費額及び観光客数が回復する一方で、入館者数が回復していないことがわかる



観光客に訪問先として選んでもらうため、堂本印象美術館の知名度および観光の際の優先度を高める必要があるのではないか

方法

周辺地域の協力のもとで観光客向けのマップ作成を行い、**堂本印象美術館の知名度を上げる**、約 20 ヶ所に 1000 部配布することで様々な人にアプローチ

マップ作成班と協力依頼班の 2 班に分かれて効率的に作業を行う

【マップ作成】

対象エリアの決定→イラスト作成→いただいた意見に基づき修正→印刷

【協力依頼】

掲載、配布、掲示許可の交渉(電話、訪問)→企画説明→各店舗の意見・要望を聞く

マップの概要

【表面】

- ・寺院、大学、美術館に加えグルメ、お土産・体験教室に分けて紹介
- ・各店舗の商品をイメージしたイラストを掲載
- ・海外からの観光客に向けてローマ字表記
- ・寺院と美術館の間の徒歩での所要時間を記載

【裏面】

- ・堂本印象美術館及び企画内容の紹介
- ・堂本印象美術館のホームページの QR コードを掲載
- ・QR コードからアクセス数の確認が可能(1 月 7 日時点で 56 回)

期待される結果

- ・堂本印象美術館の知名度向上
- ・周辺地域の活性化
- ・美術館、周辺施設間のつながりの強化
- ・親しみやすいデザインで、若年層からの知名度向上→有料入館者数の増加

反省点

- ・受講生同士での意見や情報の共有が不足していたこと
- ・マップのリリース時期が当初の予定より遅れてしまったこと
- ・短期間で周辺施設への協力依頼や交渉を行う必要があったこと

学んだこと

- ・日程の確認及び受講生同士で意見や情報の共有を行うことの重要性
- ・電話やメールといった間接的な手段だけでなく、地域の方と直接顔を合わせて協力依頼や交渉を行ったことで、地域の実情を知ることができたこと

まとめ

- ・多くの方々に興味を持ってもらい、堂本印象美術館の知名度向上に寄与することができた
- ・マップ作成を通して、堂本印象美術館だけでなく、周辺の飲食店や観光スポットの位置、さらには各店舗の看板商品といった地域の魅力に気づくことができた
- ・地域の方の意見を取り入れる(ローマ字表記、イラスト等)ことで、利用者目線からマップを作成することができた

「嵐電×地域×立命館 フジバカマプロジェクト」報告会レジュメ

担当：楯岡 向井 岡本 田中 佐藤 荻田 濱口 協力：立命館大学地域連携課 京福電気鉄道株式会社

1. フジバカマとは

京都府の絶滅寸前種に指定されている植物。アサギマダラという渡り蝶が花を好んで台湾から飛来する。

2. プロジェクトの概要・目的

「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」は嵐電×地域×立命館の取り組みとして、2021 年度より本格始動した。都市化や環境の変化によって数が激減しているフジバカマの育成・保全活動を嵐電、地域、立命館大学が連携して活動を展開し、SDGs 目標 15「陸の豊かさを守ろう」と SDGs 目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」への共感を促すことを目指す。今回のシチズンシップ・スタディーズの授業では、フジバカマという一つの植物を通して地域とつながり、フジバカマの保全活動をさらに促進していくために活動。我々受講生は 10 月から嵐電沿線フジバカマプロジェクトに参加。

3. 活動の目標

成果目標：Instagram による広報と当日の活動を通じて「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」の魅力を感じている人が増えている。

行為目標：私たち受講生が、フジバカマのことを知らない人が初めてフジバカマに触れあえるきっかけを作ると同時に、SNS 等を使い PR していく。

4. 活動着手までの課題&計画

4-1、△から○へ

△これまでの活動課題	課題の背景	○改善方法
匂い袋の実用性のなさ	日常生活で実用的に使えない 当日に作って終わりにになってしまう	キーホルダーにすることで実用性を高める
広報活動の行き詰まり	拡散性の低いツールの使用 一方的な情報発信	Instagram アカウントの運用 →双方向の情報発信（リール動画によって受動的に情報を得られる）
活動母体の分散による統一性のなさ	学内での分散的な活動	Instagram の共通のプラットフォームを通して学生間の活動が協力して成り立つ活動であることを再認識し、よりつながりを感じられるようにする

4-2、○から◎へ

○これまでの活動	◎改善方法
広報ポスターのデザイン	フジバカマンの塗り絵を導入し、子どもの目を惹きつける広報ポスターへと改良し、塗り絵がフジバカマンやフジバカマを知るきっかけにする。
イベント運営	塗り絵によって作業の空き時間を有効活用することができる。また作成後の塗り絵は嵐電嵐山駅にあるフジバカマの足湯に展示し、連携体制の可視化につなげる。作成してもらった塗り絵は嵐電嵐山駅で展示予定。

5. 活動① イベントの開催

草木染め体験

日時：2024 年 11 月 23 日（土）9 時～12 時

場所：嵐電御室仁和寺駅（駅前広場）

イベント概要：乾燥したフジバカマを使って、木綿のハンカチや絹の布に草木染めをする。

参加者：小学生とその保護者、学生 計 55 名

フジバカマオリジナル匂い袋キーホルダー作り

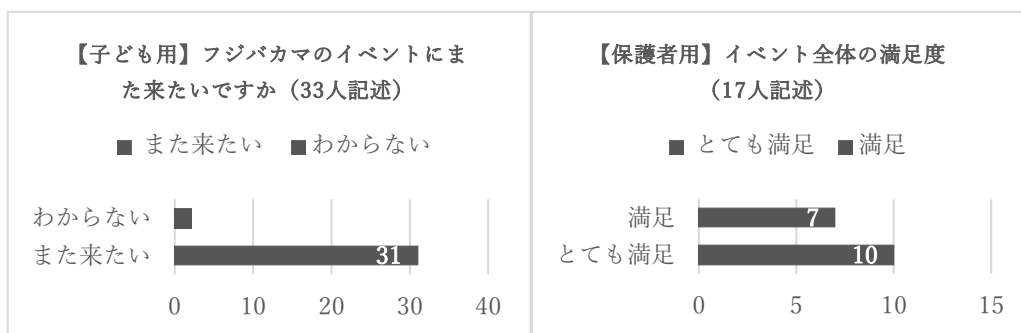
日時：2024 年 12 月 14 日（土）9 時～11 時

場所：立命館大学衣笠キャンパス 末川記念会館 SK101 号教室

イベント概要：シチズンシップ・スタディーズ受講生主催イベント。11 月に草木染めをした絹の布を使ってキーホルダーを作る。

参加者：小学生とその保護者、学生 計 76 名

6. イベントの効用（アンケート結果より）



〈その他感想〉

子ども：「シールを貼ったり、スタンプを押したりするのが楽しかった。」

保護者：「去年よりもパワーアップしていてキーホルダーなのもうれしかった。」

7. 活動② Instagram アカウントの設立

嵐電沿線フジバカマプロジェクトの公式アカウントの設立

(<https://www.instagram.com/fujibakama.r/profilecard/?igsh=aXRmcTN2bjAxZThu>)

8. Instagram の効果（2025 年 1 月 7 日時点）

フォロワー数	57 人	リール動画総再生数(3 つ)	578 回
投稿数	10 回	投稿いいね総数	117

9. まとめ&改善点

イベントを通して、運営上および準備段階の反省点は数多くあるが、昨年の倍以上の方が参加してくださり、昨年よりも多くの人にプロジェクトの魅力を伝えられたと感じている。今回のイベントを通して、御室小では昨年以上にフジバカマの保全活動が浸透していることが分かった。今後は金閣小・衣笠小を中心に他の小学校を巻き込んだ活動を増やしていきたい。加えて Instagram については 11 月からの開始ということもあり、現時点での拡散力はあまり高くはないが、継続していくことによって、①拡散力の向上、②これまでの活動記録としての役割、が期待できる。

漢字探検隊～漢字を広めよう～

目標：活動先で出会う人たちに漢字の魅力を伝え、興味を持ってもらうようにする。

【スケジュール】

10 月	・事前学習（漢字遊び体験、フィールドワーク） ・Asia Week 2024（OIC） ・振り返り ・企画会議
11 月	・企画決定（ツリー制作、クイズラリー、創作イベント） ・アンケート作成
12 月	・ツリー完成 ・BKC 学園祭 ・振り返り
1 月	・活動報告会

【Asia week2014】

私たちのシチズンシップスタディーでの初めてのキャンパス外活動は、10月20日に大阪いばらき市にておこなわれた「Asia Week 2024」での漢字探検隊ブース運営の補助だった。来場者のほとんどがキャンパス周辺に住む近所の方々と、私たち自ら漢字に対する興味を広げながら、半日ほどの時間だったが、特に数が多かった中学生未満の子どもにもわかってもらえやすいように向き合うことができた。また、このイベントでは、充実した時間を過ごせただけでなく、次の活動への手掛かりとなる経験を積むことができた。

【OIC 学園祭】

次にびわこ・くさつキャンパスで行われる文化祭の準備に取り掛かった。運営の補助として参加した前回とは違い、今回は自分たちで内容を考え、展示するものだった。いくつかの案が出た中で、幅広い世代の方々が興味を持って楽しんでもらうように何段かの難易度に分けた漢

字クイズラリーと子どもが触って画数について考えられる漢字画数ツリーや、主に古代文字で制作する消しゴムハンコやプラスチックで作るキーホルダーを作成することに決まった。ここまでは順調に決まったのだが、漢字ツリーを作るうえで素材やサイズ、どうしたら子供が喜んでくれるかなどが非常に悩ましい点だった。そこで役に立ったのがアジアウィークでの経験で、来場した子供の背の高さや年齢など、実際に触れ合う体験を経たことで、具体的なイメージを持つことができ、創作への大きな参考になった。

それぞれのブースも多くの方が来場しており、キーホルダーと消しゴムハンコのブースでは子どもと保護者が一緒に創作をしながら漢字について考える場面が多くみられ、画数ツリーやクイズラリーにも興味を持って挑戦していた方を多くいた。漢字探検隊のイベントに以前も参加したことのある来場者もあり、こちらが勉強になるような漢字の知識を披露してくれるなど、アジアウィークと同様、来場者とともに私たちも多くを学べたイベントだった。

【まとめ・振り返り】

「この企画を通して、漢字への興味・関心は高まったと思いますか。」という質問に対して約9割の方が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。一方で、任意のコメント欄には「難しい」という意見も複数あった。また、「スマホやパソコンの普及で実際に文字を書く機会が少なくなっていたので、このような企画は楽しかった」といったコメントが寄せられた。このことは私たち大学生にも非常に当てはまることであるため、衣笠のキャンパスで企画を考える際に、参考になった。

BKC 学園祭では400名以上の方に足を運んでいただいた。ブースは会場の奥の方にあり、多くの来場は見込めないと考えていたが、想定よりも多くの人に来場してもらう方ができた。この要因として、見学するだけでなく、3つの体験型創作イベントを企画したことが挙げられる。実際に自分の手を動かす企画であると興味を持ってもらいやすい。また、クイズ大会をクイズラリーに変更したことで気軽に挑戦できるようになり、親子間のコミュニケーションが増えた。

【展望】

今後、BKC・OICの実施だけでなく衣笠で漢字に興味を持ってもらう活動をしたいと考えている。話し合いの中では、古代文字のデザインされたTシャツなど漢字のグッズの販売、校内での展示、景品付きのクイズ企画、衣笠祭典での漢字ブースの出展、漢字を手書する機会が減ったことを受けて漢字の手書き企画といった案が出た。

南草津と「宿場町・草津」をつなげるプロジェクト

メンバー紹介：高橋顕作・奥田智陽

1. 活動目的

当プロジェクトの目的は2点ある。まず、1点目は我々がこのプロジェクトを通じて、草津市に住む住民の一人として草津についての理解度を深めることである。

当プロジェクトは南草津と草津駅付近の宿場町をつなぐプロジェクトである。そして、その区間をつなぐためには宿場町の魅力、ひいては草津市のことについて深い理解を有していることが必須である。

我々に限らず、南草津に住んでいる人々、特にBKCの学生は草津のことについてあまり興味がなく、よくわからないという人が大半である。大抵、その理由は草津について知る機会が乏しいこと、もし知る機会を得たとしても情報量が多すぎて、結局は魅力を発見しても解像度が低いことにある。そのため、ゲーム感覚で楽しく草津の魅力を発信するものが必要だと考えた。

2点目は人として成長するためである。このプロジェクトは草津についてよく知る草津市教育委員会、草津宿街道交流館の方々の協力が必要不可欠である。このプロジェクトでコミュニケーション能力、協調性が身につくと考えた。

2. 草津宿とは

草津宿とは、東海道・中山道という二つの大きな街道が分岐・合流する、交通の要衝であった場所です。

(引用：[草津宿と本陣について | 草津市](#))

3. スタンプラリー

南草津と「宿場町・草津」をつなげるプロジェクトとして、我々はスタンプラリーを立案・実行した。スタンプラリーは2回行い、それぞれスポットの一部及びスポットの説明の文章を差し替えた。図1に第一弾(~11/30)のスタンプラリーの結果、スタンプラリーの参加者画面を図2に示す。

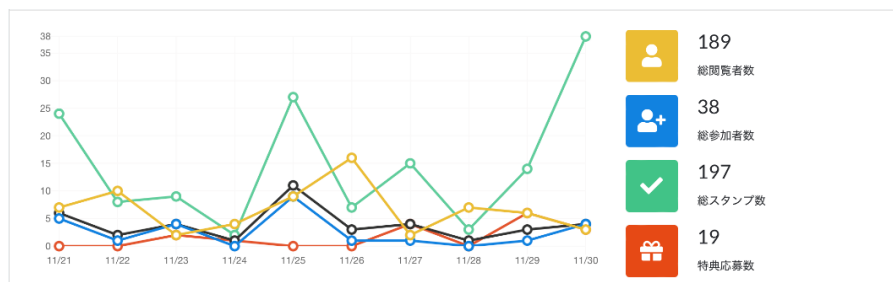


図1-1.第一弾のスタンプラリーにおけるスタンプの日付別累計(11/30 時点)

スタンプ状況			
#	スポット名	スタンプ数	スタンプ率
1	常楽神社	32	
2	矢倉雷火堂	24	
3	矢倉船政神社	17	
4	草津川	17	
5	経路土川	16	
6	パーカリー＆カフェ基本陣	16	
7	立木神社	15	
8	遠分道標	14	
9	草津市街	13	
10	草津道標	13	
11	草津川神社	10	
12	大森神社	10	

図 1-2.第一弾のスタンプラリーにおけるスポット別スタンプ数(11/30 時点)



図 2.スタンプラリーの参加者画面

4. その他の広報活動

他にもみなくさまつりの出店、えむえむ草津のラジオ出演、ポスターを用いて広報活動を行った。



図 3.えむえむ草津の出演

5. まとめ

- ・プロジェクトを進行していく中で「草津市」という市の歴史や文化について深く学ぶことができた。
- ・スタンプラリーの実現は草津市街道交流館の方々の協力があつたおかげであり、「共働」の重要性を改めて感じた。
- ・広報にかなり苦戦し、プロジェクトや魅力の発信は長期間行うことが前提で、人に伝わりやすいスタイルを考えることは重要だが、同時に難しいと身をもって感じた。

立命館大学シチズンシップスタディーズ

次世代の草津ブランド商品をつくるプロジェクトチーム

メンバー：亀垣 敦史・加藤 瑠・斎藤 亜美・小比賀 真耶

1. プロジェクトの概要と活動目的

今回のプロジェクトでは、草津ブランド推進協議会（草津市役所商工観光労政課）が推進する草津ブランドの認証商品の一つであり、草津市の市花でもある、「アオバナ」の花びらから作られる青色色素の粉末や原液を利用した商品開発に取り組んだ。また、商品開発の中で、道の駅グリーンプラザからすまと共に、アオバナの青色色素を使った青い「あおばなソフト」の開発に取り組んだ。

2. 草津ブランドとは何か

草津市における地域産業の活性化と市のイメージアップを目的に、平成 26 年 12 月設立の草津ブランド推進協議会が認証した草津市内の魅力な地域資源のことで、地元をはじめとする多くの人に愛され、全国に誇れる草津ブランドを地域で育てる事を目指している。最初は、農水産物 6 品目を「草津ブランド」として認証し普及・啓発を行ってきたが、現在では農水産物の他に加工品・工芸品を追加し、計 15 品目が「草津ブランド」として認証されている。

＜草津ブランド認証商品一覧＞

草津あおばな	草津あおばな会
草津メロン	JA レーク滋賀 草津野菜センター
愛彩菜	
琵琶湖からすま蓮根	
琵琶湖元気アスパラ	
近江草津米 匠の夢	JA レーク滋賀営農購買課
うばがもち	株式会社南洋軒
東海道草津宿 天井川	古川酒造有限会社
純米吟醸 草津政所・単式蒸留焼酎 大吟醸粕取り焼酎 草津政所	太田酒造株式会社
松里みかさ・松里もなか	松利老舗
瓢箪	株式会社瀬川元 瓢泉堂
金属工芸品	銀峰工房
草津焼	淡海陶芸研究所
ロートアイアンによる鉄製品	株式会社ナルディック
鍛造による鉄製品（日本刀）	田中貞豊鍛刀場

3. 商品開発の活動内容

今回の商品開発の過程の中で、アオバナの味を決めることが大変難しかった。アオバナの花びらは味や香りがなく、青色から味をどのように表現するのが決まらず、アオバナの青色を表現出来そうな爽やかな香りと華やかな甘みの味をどの味の組み合わせで調合すればいいのかで停滞した。当初はブルーベリーを軸とした味を予定していたが、ブルーベリーの味が主張し過ぎてしまいあおばなソフトの特徴が消えてしまった。道の駅で行った試作の後、市役所の方からアドバイスをいただき、爽やかな香り(ミント・ライム・すだち等)と華やかな甘み(イチゴ・メープルシロップ・甘酒等)を含んだアオバナらしい味を作ることになった。草津ブランド推進協議会の方のアドバイスと四回の試作を経て、すだちメープルというアオバナの青色を表現するのに最も相応しい味を見つける事ができた。すだちを2、メープルを3、アオバナ青色色素の原液を4の比率で混ぜることで、アオバナの綺麗な青の状態を保った液を作ることができた。

また、あおばなソフト以外の商品としてパンケーキ・フロート・タルト・ムース等の案が上がり試作を行った結果、タルトとフロートがあおばなの良さを生かせる商品となった。

4. まとめ

・今回の活動で草津ブランドを初めて知り、草津ブランドがいかに愛され地元の人々との関りがあるのか知ることができた。BKC ウェルカムデーで行ったアンケートの結果、草津ブランドを知らなかった人が草津ブランドを知っていた人の倍以上居て草津ブランドを知らない人が地元でも多くいることにとても驚いた。草津ブランド×立命館のインスタグラムを使い、試作の様子を投稿してフォロワーに活動内容と草津ブランドを伝えることができたため、この活動を通して草津ブランドをより多くの人たちに知ってもらえたと思う。

・みなくさスイーツパーティーやBKC ウェルカムデー等のイベントを通じて草津市に住む様々な方から草津市に抱いている印象を調査したが、草津市に来て間もない我々が持つ印象とは異なっていたため新鮮に感じた。草津市には江戸時代に東海道の宿所として栄えた草津本陣や草津ブランドをはじめとした農水産物があり、これらを多くの人たちに知ってもらいたいと感じた。

・青花製彩の方へインタビューしたことで、アオバナへの思いと情熱を知ることができた。アオバナは草津市で古くから栽培されている青色天然色素という草津市固有の、魅力的な資源なので草津の宝として今後も発展して欲しいと思う。

シチズンシップスタディーズ 活動報告
～投票率向上に向けた模擬投票イベント～
安達圭吾・黒木美羽・長村陽香

本プロジェクトの概要

若者の選挙投票率は、他の世代と比べかなり低い傾向にあります。2021 年の衆議院選挙では、20 代の投票率が最も低く 33.9%であり、60 代と比べると 40%ほど差がありました。これは、若者の政治や選挙に対する関心の低さや選挙制度及び投票方法への不安の表れなどが投票に行くことを躊躇させているからだと思われます。そこで、私たちは、若者の投票率を向上させるため、草津市役所の方々と共に、模擬投票イベントの開催やInstagramでの啓発活動を行いました。また、10 月 27 日に行われた第 50 回衆議院議員総選挙の期日前投票の立会人にも参加し、私たち自身の選挙に対する理解も深めました。

2. 活動目標

2024 年 12 月に実施された模擬投票イベントや SNS の運用を通し、子どもや 10～20 代の若者をはじめとしてより多くの市民にとって投票を身近なものにすることを目標として活動を行いました。

3. 主な活動内容

活動月	活動内容
10 月	・立命館大学衆議院議員選挙期日前投票ボランティア ・イベントに向けた準備 (選挙キャラクター・キャッチコピー作成、インスタ周知)
11 月	・イベントに向けた準備 (パーカー作成、選挙公報・ポスター作成、植樹候補の考案)
12 月	模擬投票イベントの実施(イオンモール草津)
1 月	植樹式

【期日前投票】

BKC 内セントラルアークにて 10 月 24・25 日に開設された第 50 回衆議院議員総選挙の期日前投票所で、投票立会人として携わりました。期日前投票という制度が如何に活用されているかや、投票所の運営がどのように行われているかを知る貴重な機会になりました。

【模擬投票イベント】

12月14日(土)イオンモール草津で、草津市市制施行70周年を記念として市役所に植樹する樹木の投票イベントを行いました。候補の樹木は「ハナモモ」と「モミジ」の2つに絞り、実際の選挙と同じ記載台と投票箱を使用して、投票を実施しました。投票結果は、「ハナモモ」194票、「モミジ」134票、無効票6票となり、草津市役所に植樹する樹木は「ハナモモ」に決定しました。また、イベントを実施するにあたって、参加者300人の目標を掲げていたため、準備段階で様々な活動を行いました。

①キャラクター作成

選挙に対して親しみやすさをもってもらうために選挙キャラクターを作成しました。草津市の市章をモチーフに市の花として指定されている「あおばな」などの草津要素も多く取り入れ、「セレクトィーナ」というキャラクターを作りました。また、「セレクトィーナ」は、イベントの参加者特典として配布するファイルやイベントで着用するパーカーなどのデザインに使用し、認知度向上に向けて取り組みました。

②キャッチコピーの作成

私たちの活動のテーマとして、「Your vote is your future -あなたの投票があなたの未来となる-」というキャッチコピーを掲げました。ひとりひとりの1票とそれぞれの未来のつながりを示すことで、投票に対して前向きな気持ちになれるキャッチコピーに決めました。

③選挙公報・ポスター作成

今回の模擬投票の候補となったハナモモとモミジそれぞれの魅力を紹介する選挙公報とイベント集客のためのポスターを作成しました。

④Instagramでの周知

Instagramアカウントを開設し、模擬投票のイベントの周知をはじめ、期日前投票の案内やセレクトィーナの紹介を行いました。大学生や草津市の関連アカウントに多くフォローいただき、私たちの活動や投票についてを伝えることができました。

4. 今後に向けて

今回行った模擬投票イベントのように、誰でも気軽に投票に関わることができる機会を定期的に持つことで、実際の選挙投票においても関心を持ってもらうことができ、投票率の向上につながっていくと考えています。

5. まとめ

模擬投票イベントやそれに向けた活動の中で、当初目標としていたように多くの市民の方々にとって「投票」を身近なものにできたと思います。この活動で若者の投票率向上に向けた方法を考える過程で私たち自身の投票に対する意識も高まったと感じています。

草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト 活動報告

山中良介（食マネジメント学部3年生） 左右田一真（理工学部2年生）

1. 今回のプロジェクトの目的

本プロジェクトは、中間支援組織である草津市コミュニティ事業団と一緒に、草津市内のまちづくり協議会などのまちづくり団体と立命館大学のサークルなどの学生団体の交流機会を創り出すためのマッチング会を企画実施するプロジェクトである。

プロジェクトの目的は、今年度のマッチング会は4年目に当たるため新たに斬新な学生団体を勧誘しマッチング会にて各地域のまちづくり協議会と交流を深めることによって、新たなアイデア、案とともにまちづくり協議会にとってはそれぞれの地区での各ニーズに合わせた企画をすることで地域活性化を目指す。（これは近年地域で活動している人たちが高齢化していることや、若い世代に情報が届かないことなどが問題であるため）立命館大学の学生団体にとっては活動の機会を得ることができ活動の幅の拡大にも繋がり、マッチング会はその第一歩であり、同時に草津市の地域へ貢献することを目指す。

2. 今回のプロジェクトの目標

この企画は通年で行われており、今年の目標としてはマッチング会に10の学生団体参加なおかつたくさんの新しい学生団体にマッチング会に来てもらうことを目標とする。

3. マッチング会開催までの活動内容

・まちづくり協議会担当者へのヒアリング調査

草津市内には14のまちづくり協議会があり、今回は二つのまちづくり協議会（玉川、大路）に足を運び、その各地域での現状把握や各地域の課題、まちづくり協議会がもっている人材、ニーズなどに合わせた学生団体を勧誘するためのヒアリング調査を行った。

主なまちづくり協議会での意見としては、「周りにたくさんの小学生が住んでいるので、子供たちを巻き込んで何か企画をしたい」、「高齢化が進んでいるため今までにない学生の持っている斬新なアイデアが欲しい」などまちづくり協議会によっていろいろな意見をヒアリングすることができた。

・学生団体への声掛け、勧誘

最初に紹介したまちづくり協議会でのヒアリングをもとに各まちづくり協議会にニーズのあった学生団体を探し出し声掛けを行った。声掛けは、「BKC ウェルカムデー」や、南草津駅周辺で行われる「みなくさまつり」などの学生団体がお店などのブースを出展するような場所で直接行いました。もう一つの方法としてSNSでの勧誘を行った。具体的には、ニーズに合いそうな学生団体にインスタグラムやフォームを通じて連絡を行い勧誘した。

・公式LINEの創設

今回初の試みとして公式LINEを作成した。公式LINEを作ることによって連絡のやり取り

を一斉送信することができることや、まちづくり協議会や草津市コミュニティ事業団の説明などを見ることができるようになった。

・FM ラジオ出演

このプロジェクトの広報活動の一つとして「えふえむ草津」の「コミュニ tea time」という番組に出演した。この番組ではこの企画の目的、マッチング会の様子、感想などを話した。

4 マッチング会当日について

* 参加団体について

・7学区のまちづくり協議会とロクハ荘に来ていただいた。

(玉川、老上、矢倉、山田、草津、常盤、大路)

長寿の郷ロクハ荘

参加していただいた学生団体 10 団体

チャリティーサンタ、飛行機研究会 PAPT、マジックプレイヤーズ、サービスラーニングセンター学生コーディネーター、TOM SAWYER、Ecomeals、万博学生委員会 Sustable、料理サークル meRci、学生団体カノール、食マネジメント学部マリアゼミ、ぴあノバ、ボッチャサークル Largo、

* 話し合いの流れ

話し合いはワールドカフェ方式を採用し、まずサークルの学生団体は指定のテーブルにつき、まちづくり協議会の皆さんに 20 分ごとに席を移動して学生サークルの席に座っていただいた。3 回目以降は自由に話し合いを行った。なお 1.2 回目については、学生とまちづくり協議会のペアーを事前に決め話し合いを行った。

5 マッチング会の成果・感想

まず結果的に 12 団体の学生団体が参加していただき、目標である学生団体の参加総数 10 以上という目標を達成することができた。また飛行機研究会では子供たちと紙飛行機のブースを開く、ボッチャのサークルもとてもニーズに合っていて、体験型スポーツとして出せたりするなどとても有意義な交流になったと思った。また、マッチング会の後の満足度アンケートの結果では、ほとんどの学生団体が今後の活動に生かすことができそうと回答していただき、各学生団体今回話し合ったことで「見つけられない気づきを得ることができた」、「新しい出会いがありよかった」など前向きな意見がおおく寄せられていた。今年で 4 回目の開催だったが、年々マッチング会が地域と学生に浸透しているのを感じた。これからも地域とのつながりを大事にしていきたいと思った。

これからの課題

やはり学生団体は 4 年で卒業してしまうことから継続して草津市内の方々と交流することが難しいと感じた。また高齢化が進んでいるため学生の企画が草津市の方々とギャップが生じる可能性が考えられる。

みずとわプロジェクト

-報告レジュメ-

「メンバー紹介」

吉村拓朗、塩谷聡也、長谷春奈、大塚真和、チェミンギョン

「茨木市の北部地域について」

茨木市北部地域は大阪にありながら、古き良き暮らしと昔ながらの風景が残る農村地域である。大阪からアクセスが良いにも関わらず、「若者の流出、農村地域としての労働力の不足、休耕地や里山の荒廃」といった課題を抱えている。

「一般社団法人みずとわ」

一般社団法人みずとわとは、自然と調和した生き方や社会のありかたを体現することで、人々の心や考えを動かすことを目的としている。目的達成のため、地域内外を問わず、共感する仲間や企業を巻き込んだまちづくりを行い、生きるのに必要なものは可能な限り自(知)給自(知)足することを大切にしている。詳しく言うと、環境負荷とコストをいかに減らしつつ快適にしていくか、そのための研究や実践を楽しく行える場となっている。拠点として、茨木市千提寺に「にんげん小屋」を設けており、日々精力的に活動している。

「活動テーマ」

持続可能な「食」を考え、できることを実践する

「地域活動を行う上でのチーム目標」

みずとわを知る

「チーム目標にどれだけ近づけたか」

吉村：チーム目標の達成度は半分（50%）

今回、ボランティア活動に際しては中井さんの独活農園（千提寺 fram）、横峯さんの養鶏場（清坂 terrace）・畑を訪問させて頂いた。その中で、三島独活や養鶏・山のことについては十分に学ぶことができたが、「みずとわ」という団体については詳しく知ることができなかった。主な理由としては、訪問させて頂いたのが、中井・横峯さんの事業（農業）のみで「みずとわ」としての活動には参加していなかったことが挙げられる。

塩谷：チーム目標の達成度は 80%

私は何者かにならなければならない、合理性や効率性こそが正義である、という都会の息苦しい価値観に縛られていた。しかし、みずとわさんの活動を通じて、自然や日本産業の危機に向き合うための責任感や義務感が生まれ、それらの記事やニュースに意識的に目を通すようになった。私はみずとわさんの活動を知っていくにつれて、新しい展望や視点を得ることが出来たと感じる。

長谷：チーム目標の達成度は 60%

清坂 terrace と千提寺 farm.の事業を体験し、それぞれの活動については実際の取り組みや現地での対話を通して理解を深めることができた。しかし、根源となるみずとわの事業を体験できなかったことが目標達成に 40%近づけなかった大きな要因として挙げられる。また、現地でも受け入れ先の方と十分にコミュニケーションをとる時間を確保できなかったことも課題であった。

大塚：チーム目標の達成度は 60%

みずとわがどのような方法で養鶏や作物を育てているのかを概ね理解することができた。また、普段体験しない農作業や養鶏をお手伝いすることで、第一次産業を知ることができた。40%達成できなかった理由は、みずとわがどのようにして地域社会に影響を与えているのかがはっきり理解できなかったからである。また、みずとわの作業のみに立ち会っていたため、モットーである「楽しくサバイバル」の実態を知ることが出来なかったことが挙げられる。非日常ながら地域社会に関与しながら、体を動かして汗水たらし仕事をするということに達成感を感じた。

チェ：チーム目標の達成度は 60%

農業は自然と触れ合う仕事なので、作業を終えて振り返ると、何か癒されるような気持ちになった。みんなで農業をすると、大変さを共有できるので、内面的な親近感が生まれ、自然にコミュニティが形成されているように感じた。どのくらいチームの目標に近づけたかについては、みずとわがどのようなコミュニティなのかについては、まだコミュニティの人全員に会ったわけではないので、約 60%程度だと思う。しかし、みずとわの目標である「一緒に農業をする仲間を探す」という点については、私はこれからもみずとわに参加し、継続的に活動していく予定だ。

「まとめ」

全体として、「みずとわを知る」というチーム目標の達成度は約 6 割だったが、清坂 terrace・千提寺 farm の活動には積極的に参加することができ、そこで農業の大変さ・日本の食事情などを知ることができたと考える。

み・らいず2 レジюме

1. メンバー名

戸田実凜、政久尊信

2. 活動テーマ

子どもたちの「学び」や「体験」の機会を作るために100人が参加するクリスマス会を運営する

3. み・らいず2の事業の概要

み・らいず2は2001年に設立されたNPO法人で、「だれもが、自分らしく地域で暮らせる社会」を目指して活動している。み・らいず2にはヘルプ事業部、サポート事業部、スクール事業部、スタディ事業部、ワークス事業部がある。子どもの貧困問題に取り組む、不登校の子供たちを対象に学習塾を開く、働きづらさを感じている若者の就職をサポートするなど、幅広い事業を展開している。

4. 主に関わった事業について

私たちが関わったのはスクール事業部である。スクール事業部では発達障がいや知的障がいのある児童期の子どもたちをサポートし、将来、社会の中で役割を持って生きていくことができるように支援を届け、子どもたちを取り巻く環境を整えるという事業を展開している。

5. チーム目標

多様な子どもたちとの関わりを通じて、自分たちの価値観・視野を広げるとともに、子どもたちが自分らしく生き活きと過ごしている状態。

6. 活動内容

○1日目：み・らいず2スタッフの木村さんと顔合わせ・打ち合わせ

10月16日にみ・らいず2梅田事務所でスタッフの木村さんと顔合わせと打ち合わせを行った。活動内容や過去の活動について理解を深め、今後の活動の見通しを立てた。

○2日目：ボランティア説明会

ボランティア説明会では、み・らいずスクールのスタッフとして働くために重要な心掛けや、このようなことが起こったらどのような行動をとるかについて考えた。

○3日目以降：み・らいず2高槻事務所でスクールのスタッフとして活動

(政久)活動日時：11月5日16:30-20:00, 12月14日9:30-15:30

11月5日に初めて活動を行った。この日は、小学校高学年のクラスに参加し、お礼状作成と9マスおにごを行った。初めて小学生と関わりコミュニケーションの取り方が難しく感じたが、子どもたちと9マスおにごを楽しむことができた。12月14日は年長のクラスと高学年のクラスに参加した。年長のクラスでは簡単な遊びをいくつか行った。年長の子どもと関わる機会がこれまでなかったため、うまくコミュニケーションをとることができなかった。この二日間を通して、同年代や年上と、小学生以下の子どもたちとのコミュニケーションの取り方は全然違うことを実感した。

(戸田)活動日時：11月28日16:30-20:00, 12月5日16:30-20:00, 12月21日9:30-15:30

11月28日に初めて活動現場に入った。この日は、小学校高学年のクラスに参加し、相手の気持ちを考察する授業を行った後、「はあって言うゲーム」を行い、余った時間でトランプの大富豪をした。初めは、初対面の子どもたちとの接し方に苦戦したが、子供達の話に興味を持って聞いたり、共通点を探したりすることで打ち解けることができた。12月5日も小学校高学年のクラスに参加した。この日は、話を聞くときの態度に関する授業を行った後、「ワードウルフ」を行った。前回と同じクラスに参加し、子どもたちと会うことが2回目だったため、修学旅行やクリスマスの会話をしたことで、子どもたちと前回よりも活発にコミュニケーションを取ることができた。12月21日は幼稚園児・小学校低学年のクラスと小学校高学年のクラスに参加した前半のクラスでは、幼稚園児と小学生各々のレベルに合わせたプログラムを行った後、全員でクリスマスリース作りを行い、余った時間でボウリングをした。私は主に幼稚園児のサポートについていたが、人見知りをしない子だったため、楽しく一緒に活動を行うことができた。後半のクラスでは、会話の噛み合わせに関する授業を行った後、サイコロトークを行い、余った時間でUNOをした。授業時にスタッフの方と一緒にロールプレイを行ったのだが、子供たちが自分たちの表情までしっかりみてくれていたため、意図が伝わり嬉しかった。この三日間の活動を通じて、各々の子どもたちの特性を把握した上でコミュニケーション方法を臨機応変に適応させることが大切だと実感した。一方で、共通点で話が盛り上がる場面、話に興味を持って聞いていると嬉しそうに話してくれる場面が何度かあったため、これらのことは年齢、バックグラウンド関係なくあらゆる人と関係を構築する上で重要な要素なのではないかと考えた。

○クリスマス会

12月22日に大阪市立心和中学校でクリスマス会を行った。クリスマス会にはみ・らいず2の様々な事業部から、参加者側と運営スタッフ側として合わせて約100人が参加した。クリスマス会ではワークショップやマジックショー、音楽鑑賞などが行われた。私たちは高槻事業所の子どもたち一人につきスタッフ一人がついて見守りを行った。

7. プロジェクトの目標達成度とまとめ

達成度は60%であると考え。クリスマス会当日の円滑なサポートに向けて、事前に子供達のいる事業所に通い、コミュニケーション方法の理解に努めた。しかし、事前に関わった事業所の子供達がクリスマス会に来なかったことや、クリスマス会での自分たちの役割を詳しく理解できていない状態のまま当日を迎えてしまった。したがって、チームの目標は概ね達成できたが、スタッフの方とのコミュニケーションをもっと活発にとるべきだったと考える。

しゅくだいかふえレジメ

1. メンバー紹介

田中太陽 中村有沙 西野壮汰

2. 「活動テーマ」

こどもたちが安全に関われるつながりを増やす

3. しゅくだいカフェの概要

宿題カフェは、大阪府茨木市で活動するボランティア団体で、小学生を対象に放課後の居場所を提供することを目的としている。週に2回、茨木市の商店街で活動を行い、子供たちの宿題をサポートしたり、一緒に遊ぶことで交流を深めている。この活動を通じて、以下の目的を達成することを目指している。

- **放課後の居場所づくり**
学校での生活に疲れたり、悩みを抱える子供たちが安心して過ごせる環境を提供している。
- **親子関係の改善**
保護者にとっても、子育ての負担を軽減し、リフレッシュする時間をつくることで子供との関係性をよくする。
- **大学生との交流**
大学生や若い世代がボランティアを通じて子供たちと関わることで、子供たちの成長や課題を理解する機会が得られます。この経験は、将来の子育てにも役立つ視点を養うことができる。

4. チーム目標

子供たちが成長して大人になったときに次の世代のこどもたちに同様に支援ができるような大きな循環を作ること

5. 活動内容

毎週火曜日と金曜日の 15:30~18:30 に活動場所である FIC ベースで 4~5 人の小学生た

ちの宿題サポートを行い、その後に一緒にボードゲームなどで遊ぶ。

宿題サポートでは単純に宿題のサポートだけでなく、小学生とコミュニケーションを取りながら行っている。またゲームなども小学生たちがやりたいことを尊重し、皆が楽しめるように取り組んでいる。

小学生の外遊びが少ないという気付きとより楽しんでもほしいという思いから「逃走中」を12月27日に実施した。茨木市中央公園を貸し切って約50人近くの小学生たちと逃走中とドッジボールをそれぞれ1時間行った。

6. 活動を通しての感想や気づき

（田中） 大人たちの行動には深い意味があることに感心しました。例えば、保護者の相談を受け、普段甘やかさない子を膝に乗せてあげた配慮ある対応を聞き、自分が子供だった頃、先生たちも細やかな考えを持って接してくれていたと気付きました。改めて先生方への感謝の気持ちが生まれました。

（中村） 私は子どもたちと本気で関わることで、思い出に残る存在になることができるのかなと気づきました。本気な分、子どもたちの間で対立が起きたこともありましたが、多様性を認め合い「楽しむ」ことを本来の目的だということを確認しました。しゅくだいかふえでは、コミュニケーションをたくさんとったり多数決ではなく話し合いで物事を決めたりと、子どもたちが対話しやすい環境づくりが行われているなと感じました。

（西野） まず小学生と過ごして純粋に楽しかったです。仲良くなったらゲームの相談をしてくれたり、膝に乗ってくれたり嬉しかったです。また、活動を通して小学生について深く知ることができました。思っている以上に大人びている点やしゅくだいかふえでは楽しく過ごしていても実は学校に行きにくい背景がある点など課題も気づき、社会や地域にもっとこういう場所が必要であると思いました。

7. プロジェクトの目標達成度とまとめ

目標達成度について、私たちは30%達成したと考えている。私たちの目標は、支援している子供たちが成長した後に、私たちと同様に支援できるようになることだが、その実現は未来のことなので確実には分からない。しかし、子供たちに思い出を作り、楽しさを提供するために、私たちが提案した遊びを実施した。具体的には、「逃走中」を開催し、子供たちにとって憧れだったイベントを実現した。結果として、この活動は成功したと考えている。今後、子供たちが大人になった時に、この経験を思い出し、次の支援へとつながるきっかけになることを信じている。

そだちっこプロジェクト

- 報告レジュメ -

メンバー：増田航平、宮本沙綾

【活動のテーマ】

「子ども達の生きる力・生きる力を育むためにそだちっこくらぶでその環境を作る」

【受け入れ団体 みんなのほっとルームについて】

みんなのほっとルームは、「茨木の子育てママと、その子どもたちの笑顔を共に育むこと」を目的とし、茨木市の中心市街地で子育てひろばをひらいている。このプロジェクトでは、そこで開催されている、そだちっこくらぶの活動に関わった。

【そだちっこくらぶについて】

そだちっこくらぶは、就学一年前の年長児さん（5～6才）の「生きる力」や「生きる」力を育むクラス。週に2回、月曜日と水曜日の15時～16時の間に開催している。内容としては、お金やお店体験、自然遊び、音遊び、色遊びなどのクラスを開催している。

【そだちっこくらぶ 立ち上げの背景】

茨木市内の不登校の数は年々増加している。その背景には、自然に触れることや、個性を伸ばすことは、幼稚園や保育園任せであること、家庭教育もコロナ禍を経て孤立した「孤育て」になっていることなどがある。だからこそ、就学前の大切な1年に「生きる力」を地域、教育、家庭が共に育む環境づくりをめざし立ち上げられた。

【参加した活動内容】

ボードゲームクラス、色あそびクラス、お金クラス、音遊びクラス、山遊びクラスに参加した。（ポスターに写真掲載）例えば、ボードゲームクラスでは、商品を買ったか「買う」か「売る」かのルーレットを自分の番に回して、売買を通じて自分のお金を増やしていく、ハンバーガー屋さんゲームを行う。

私たちなりのクラスを開催することも活動に含まれており、1/15には、クラスを開催予定。年長さんが好きなモルカーを用いて、真剣衰弱などを行う。

【チーム目標の振り返り】

チーム目標は、「私たちが、地域の大人や子ども（年長）さんとの関わりを通じて、生きるために必要な力を身に着けている。例えば、自分の楽しさ・好きが分かる、様々な人と円滑に関わる（コミュニケーション能力）など。」である。

達成度 50%だ。私たちは、「生きるための力」身に着けられたとはいえない。なぜなら、私たちが開催するクラスにおいて、私たちが伝えたい「力」は何かを明確には考えきれなかったからである。私たち自身の力が、まだ、人に伝えられる段階には、達していない。しかし、クラスに関わる中で、私たちの開催するクラスで大切にしたいこと（「それぞれが、楽しむ気持ちを大切にする」など）を見つけることができた。そういったことを意識しながら、クラスを開催し、開催後も考え続けたい。

2024 年秋学期 シチズンシップ・スタディーズ -報告レジュメ-

国際理解教育外国人サポーター派遣事業

メンバー:立命館政策科学(OIC)4回 薛 越(セツ エツ)

活動先の情報

大阪国際交流財団 OFIX (Osaka Foundation of International Exchange)

目標:「国際都市大阪の実現に向け、広域ネットワークを活かして信頼される多文化共生の拠点機関」

業務内容:外国人向けの相談・情報提供、やさしい日本語研修、翻訳サービス、多言語防災、留学生会館の運営、2025 万博ボランティア事業の協力など

OFIX が実施する国際理解教育事業

目標:学校の国際理解教育を支援

沿革: 2003 年、学校へ国際交流員や留学生の派遣を開始;

2009 年、「国際理解教育外国人サポーター派遣事業」に再編

2018 年、謝金への受益者負担導入(謝金の 1/2 を依頼学校負担)、2021 年より全額負担

2023 年度実績:175 校のおよそ 8000 生徒に 205 名のポーターを派遣(サポーター登録者数 220 名)

事業内容:「国際理解教育サポーターとして登録している外国人留学生などを府内学校等で行う国際理解教育授業の講師として派遣し、異なる文化、伝統・習慣や社会などに対する理解促進のための機会を提供」

達成目標:派遣先の満足度 90%以上(2021 年度実績 96%)

(OFIXHP、中期経営計画より)

本プロジェクトにおける個人目標(メンバーが 1 名だったため、チーム目標は策定できず)

短期: ・OFIX の国際理解教育外国人サポーター派遣事業の流れを理解する(70%)

・一人でも現場でコーディネーターとして機能できる(70%)

長期: ・授業を受ける子供たちがほかの文化に対してもっと知る、興味を持つようになる

・私が自分の国の文化を子供にもっと発信できる人になる

活動内容

・コーディネーターとしての現場業務 3 回×約 3 時間(見学→補助→独自)

*場所:大東市立四条北小学校、大阪府立茨木西高等学校、茨木市立茨木小学校

**1 月下旬にほか 2 回の活動予定

- ・オフィス作業 3 回×約 3 時間(募集メール作成、アンケート集計)

気づいたこと

- ・小学生を対象に上手に発信するには、楽しませることがとっても大事！
- ・アジア系の講師と(ラテンアメリカなど)他の国の講師の授業スタイルに大きな違いがある
- ・講師が同じ授業内容を別のクラスや学校で実施しても、毎回、授業の効果や教員・生徒の感想が違ってくる
- ・担任または授業を見守る先生による紹介、ファシリテーション、まとめなども、授業の効果に影響する
- ・フィードバックとして集めたアンケート集計において、数値的な満足度よりは、記述の内容も読んだほうが、実際の現場がわかる(？)

成長できたこと

- ・社会人を相手に挨拶できるようになった(？)
- ・仕事内容に関して疑問点がある時、一番分かりやすい伝え方で聞ける

悩んだこと

- ・高校生を積極的に反応させるための技はあるけどアジア人には難しそう!!
- ・私だけ名刺がない……

貢献できたこと

- ・直接授業を提供する講師は担わなかったが、子供たちがうまく授業を受けられるように努めた
- ・私の支援により初めて講師をする人がスムーズに授業を行えたので、これからも引き続きやりたいと聞いている
- ・長い間講師をやってきた人が、さらによい反応をもらえるようにサポートを行った

今後の展望

- ・報告会後の 1 月にも 2 回、ボランティア活動の予定があるため、そこで活動を完遂する
- ・自分も講師に登録し、自分ができる発信内容と発信方法の工夫について深く考える
- ・他の場面(例:中国からの交換留学生をサポートする仕事など)で今回の経験を活用する

まとめ

私は留学生なので、異文化理解の体験が今までも数多くあったが、日本の教育現場で直接、異文化理解教育のファシリテーションを担ったのは初めてだった。グローバル社会の施策を多角的に考える上で、貴重な経験ができたと思う。

「持つ」ものを「活用する」ということ

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

＜担当プロジェクト＞

（衣笠 GA クラス）

- ・時代祭応援プロジェクト
- ・堂本印象美術館広報プロジェクト
- ・嵐電×地域×立命館フジバカマプロジェクト
- ・キャンパス漢字文化普及プログラム



「耳学問」という言葉があります。文字通りの意味であれば「耳で聞いた学問」という意味ですが、自分で学んでいないことを揶揄して「聞きかじりの知識」という意味もあります。もちろん、他人の話から得た知識で学びになることもあります。少なくとも「シチズンシップ・スタディーズ」の GA クラスでは、サービス・ラーニングにおける「メモの書き方ガイド」を紹介し、各種の活動を通して学ぶ上では、現場の語りに耳を傾けることが大切と説きました。

「耳学問」の否定的な意味は「知識」の水準に止まることにある、と私は捉えています。つまり、ただ知っているだけであって、せっかく道理が認識できていることを自らの行動に活かしていないことが問題なのではないか、ということです。既に生成系 AI の時代の今、例えば、Google でも ChatGPT でも、適切な問いを入力すれば、果てしない情報あるいは情報群の中から端的な回答を提示してくれます。そのため、その回答をどう受け止めるのか、そして受け止めた結果を次の行動にどう活かすのか、自らの判断が求められます。

別の言い方をすれば、インターネットにおける膨大な情報の中から何が本質かを選び抜く知性が問われる今、知識だけではなく知恵を磨くことが重要です。ここでまた、新しい言葉が出てきました。知識と知恵は何が違うのか、困ったら「ChatGPT」に訊ねてみるのが現代の知恵です。実際、訊ねてみたところ、＜「知識」と「知恵」は似ているようで、意味や使い方に明確な違いがあります＞とのことです。比較表まで示した上で知識は「持つこと」、知恵は「活用できること」が重要だと、明確な区別を示してくれました。

知識をもとに知恵を磨くことを、自らが持つものをどう活用するか、と置き換えてみると、ここでも他人の言動への関心が欠かせません。とりわけサービス・ラーニングの現場では、個々の力量の差が顕著となる場面があったでしょう。そのとき、「あの人は何もわかっていない」と、知識がある自分を優位に置くのではなく、「ここは自分が貢献できる」と相互に協力し合うことができたでしょうか？これこそ、チームワークの上で、欠かせない知恵の一つです。

chatgpt.com/c/677dbd7c-4d38-8012-92f1-e5b892f66706

知恵と知識は何が違うのか？

「知識」と「知恵」は似ているようで、意味や使い方に明確な違いがあります。

知識（ちしき）

- 意味: 事実や情報、概念についての理解や記憶のこと。
- 例: 歴史の出来事、数学の公式、科学の法則などの情報。
- 特徴:
 - 主に「情報」の蓄積を指す。
 - 書籍、教育、経験などから得られる。
 - 客観的で普遍的なものが多い。
 - 知識が多いことは、知識量の豊富さを示すが、それだけでは必ずしも深い理解や応用力を意味しない。

知恵（ちえ）

- 意味: 知識や経験を基にして、物事を適切に判断し、解決する能力。
- 例: 人間関係のトラブルをうまく解決する方法、難しい状況での最善の選択など。
- 特徴:
 - 知識を元に「応用」し、「行動」に移す能力。
 - 直感や洞察力も含まれる。
 - 主観的で、状況に応じた柔軟性が求められる。
 - 年齢や人生経験とともに深まることが多い。

知識と知恵の違いのまとめ

項目	知識	知恵
本質	情報や事実の理解	情報を活用する判断力
例	歴史の出来事を知っている	歴史から教訓を学び活かす
獲得方法	学習や読書、教育	経験や熟考、内省
活用	知識の記憶や説明ができる	問題解決や意思決定に役立つか
性質	客観的・普遍的	主観的・状況依存性

例えば

- 知識は「地図」のようなもの。道や目的地の情報を知っている状態。
- 知恵は「実際にその地図を使って目的地にたどり着く力」。途中のトラブルや道の変更にも対応できる能力。

知識を持つことは大切ですが、知恵として活用できることがより重要だといえます。

ありがとう

どういたしまして！😊 また何か気になることがあれば、気軽に聞いてくださいね！

👍 🗨️ 🔄 📄 📧

ChatGPT にメッセージを送信する

🗨️ 🗨️ 🗨️

ChatGPT の回答は必ずしも正しいとは限りません。重要な情報は確認するようにしてください。

市民参加する人生

小辻 寿規（立命館大学共通教育推進機構准教授）

＜担当プロジェクト＞（BKC G1 クラス）

- ・南草津と「宿場町・草津」を繋げるプロジェクト
- ・次世代の草津ブランド商品をつくる
- ・投票率向上に向けた模擬選挙イベント
- ・草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト



みなさん、秋セメスターの活動お疲れ様でした。まだ、活動が続いていくプロジェクトもあると思いますが一旦の区切りということで、そう述べさせていただきます。

早いもので、いわゆるコロナ禍がはじまってから5年が経ちました。2019年12月に武漢市で初めて発生が確認され、その後、日本においても感染者が出ることになり2020年の大学の卒業式や入学式、授業などにも大きな影響を及ぼしましたが、みなさんはその頃、何をされていましたか？多くの受講生は中学生か高校生でしたでしょうか。

私は2020年の1月頃は前任校で仕事をしており、4月から立命館大学に着任したので、研究室の引っ越しの中でこれからどうなるのかと考えていたことを記憶しています。そして気づけば、送迎会なども全て中止になり、色々な関係がセレモニー無く、ブツッと切られた感覚でした。

ただ、そのような感傷に浸っている余裕は無く、様々な活動やイベントが中止や延期になっていく中で市民活動や地域活動、ボランティア活動がこれからどうなっていくのか、心配な日々を過ごしていました。何より、家族との生活をどのようにデザインしていけば良いのか、分からなくなっていたのが偽らざる心境です。

それから5年が過ぎ、今は当たり前のように市民活動や地域活動、ボランティア活動があつた5年前と変わらぬように実施されています。なぜ、変わらぬように実施されているのか。

「社会的レジリエンスの力でしょう。」なんて言うのは簡単です。そして、社会の大きな流れをみれば、必然です。マクロ視点とはそのようなものです。

もちろん、現場の視点で見ればそのようなことだけではありません。AさんBさんがすごく尽力してくれてとか、〇〇市長がGOサインを出してくれてとか、色々な話があるでしょう。これがミクロ視点です。

今回、みなさんは様々な活動に参加されたと思います。そこからは何が見えましたか。社会を変える何か大きな力だったでしょうか。一つの活動やイベントのプロセスだったでしょうか。それとも、無我夢中であまり多くのことは考えられなかったでしょうか。

授業の中では、みなさん一人ひとりに様々な視点から物事を考えてもらえるように構成し、その機会を提供し続けてきたはずですが、ただ、その全てを体感できた方は少ないだろうなと思っています。なぜなら、それは活動に真剣に取り組めば取り組むほど、そのプロジェクトの成功に意識がいき、マクロ視点で物事は見られなくなるから。

でも、それで良いのだと私は思っています。まずは何かに没頭しないと、真剣にやらないと、何も見えてきません。色々な経験を繰り返していくうちに、全体が見えるようになってきます。

その時に「あの時の私の活動にはこんな意味があつたのだな。」とか「うまくいったと思っていたけど、失敗だったな。」とか考えていただければ良いです。

今回のシチズンシップ・スタディーズの授業で、市民参加する基本的なスタンスは学べた（各団体から学ばせていただいた）のだと思います。

学びを学びだけでは終わらせず、これから、あなたの市民参加する人生の中で、今回の学びの意味を考え続けてください。

地域で他者にまみれ争点を知る

秋吉 恵（立命館大学共通教育推進機構教授）

担当プロジェクト（OIC GV クラス）

- ・ 茨木みずとわプロジェクト～持続可能な食を考える～
- ・ 子どもたちの「学び」や「体験」の機会をつくるために 100 人が参加するクリスマス会を運営する
- ・ 国際理解教育外国人サポーター派遣事業
- ・ しゅくだいかふえ
- ・ そだちっこプロジェクト

シチスタの活動で、ハザかけで乾燥した稲藁を回収する



2024 年度、いばらきキャンパスで開講した「シチズンシップ・スタディーズ」GV クラスは、5 プロジェクトを通して、茨木近郊地域で以下の 5 つの活動を実践した。「気候変動の影響を受ける農の現場で持続可能な食を考え実践する」「子どもたちの「学び」や「体験」の機会をつくるために 100 人が参加するクリスマス会を運営する」「【多文化共生】を目指して『違い』や『思い』を伝える」「こどもたちが安全に関われるつながりを増やす」「子ども達の生きる力・活きる力を育むためにそだちっこくらぶでその環境を作る」。それぞれの活動で学生たちは、受け入れ先の地域組織が対峙する、気候変動、社会的排除、関係性の貧困、分断といった世界で見られる社会問題が茨木近郊で顕在化した地域課題に取り組み、それを学びに変えていった。

こうした「地域を基盤とした学習」では、地域や大学で活動や集会に参加し意思決定した経験、価値や利害が対立した経験、周囲に自分の意見を表明する経験など多様な経験を得る。それは、学生たちが、活動する地域の社会的、歴史的、経済的背景を理解し、その地域の文脈を踏まえた活動を、その文脈の中で生きる人々と協働していくプロセスである。地域に入る学生も、それを引率する教職員も、彼らが生まれ育った家庭や地域の文脈に影響された資質・能力を持つ。そうした異な

る文脈で生きてきた地域の人々と学生や教職員が会合うとき、知識や価値観、資質や能力の違いから、すれ違いや小さな問題が起こることが多い。多くの学生はそこでモヤモヤとした違和感を感じる。これが、「地域を基盤とした学習」における小さいけれど学びの起点として重要な争点である。政治学者であるバーナード・クリックは、シチズンシップ教育に関する政策文書クリック・レポートで、論争的な問題の争点を知ること、シチズンシップ教育を構成する要素の一つ、政治的リテラシーを高めていく上で要になると述べている。何が正しく、何が公正さや正義になっているかを判断する基準となる公共性が、争点を知ることから構築される。」（秋吉2024）

半期の活動の中で自分ができることを探し求め、でもやもやししながら考え続けた学生たちが、臆けながら見出した「争点」という学びの起点は、彼らが知識を地域の文脈に即して調整し市民に育つ大切なきっかけになるだろう。彼らが市民に育つことが、学生を受け入れてくださった地域の皆様からいただいた想いや時間に報い、皆様の働きが実る未来へとつながることを期待したい。

引用文献：秋吉恵(2024)「8 章「地域を基盤にした学習」がもたらす教養—知識を地域の文脈に即して調整し市民に育つ—」教養教育研究会編『現代社会を拓く教養知の形成』晃洋書房